

# 大統領選挙戦からみた米国政治の展望

(The 1988 Presidential Election  
and the Future of U. S. Politics)

Mitsuhiro Saotome\*

SUMMARY IN ENGLISH : The 1988 American presidential election has shown that the American people have chosen stability and the status quo by electing George Bush as president. The Republican Party has won a third straight presidential term and the goals and policies of the new administration are similar to those of the Reagan years. Thus, the governing party remains the same and the policies similar, yet the image the party leader projects has changed. Whereas President Reagan was charismatic and skillful as a communicator, President Bush is very cautious and more of a moderate.

Presently, the international environment is not as precarious as before. The Soviet Union is no longer the "evil empire" in the eyes of many Americans. Because of this greater stability in global relations, George Bush has been able to concentrate on domestic problems. At the time of the 1988 election, the unemployment rate was low and the U. S. economy was in good condition. This, in addition to the stable global environment, gave the American public a sense of security as they went to the polls. The stability and the strong U. S. economy during the last half of 1988 worked as a plus factor for the Republican Party.

President Bush faces a Democratic majority in both houses of Congress. The 1988 election saw the Democrats gain seats in both the upper and lower houses. This balance of Republican administration and Democratic majority in

---

\* 五月女 光弘, Member of the Japanese Ministry of Foreign Affairs, now stationed at the Japanese Embassy, Washington, D. C.

## 大統領選挙戦からみた米国政治の展望

Congress shows the neutral stance of the voters. President Bush does, however, understand the inner workings of Congress better than many other presidents. His past experiences as a congressman, as an ambassador to China, and as director of the CIA will give him the administrative skills he needs in order to deal with a Democratic majority.

Over the past six presidential elections, Democrats have lost five. Three of the five defeated Democratic candidates lost by very large margins to the Republican candidates. The Democrats realize their weaknesses in presidential politics, and are seriously trying to change their past record.

As for the future of U. S. politics, public opinion should not change drastically as long as the economy stays healthy. Past examples suggest that it is always difficult to force the existing administration out of office if the economy remains strong. This situation will force Democrats to engage in even more soul-searching if they wish to improve their standing with American voters.

### I. はじめに

1988年の米国大統領選挙は、米国政治の現状維持か変革かを問いかけたものであり、結局共和党政権の3期目への継続という結果となった。しかしながら、同一政党の続投、レーガン政治の継承の形はとるもの、前大統領の「華やかなパーソナリティー」そして「強いアメリカの標榜」から打って変わって、新大統領は地味ながら堅実で、「隣人愛」、「ホームレス」、「麻薬追放」といった国内問題の解決など、思いやりのある社会を築く政治を目指す決意を表明している。

1988年の大統領選挙の行われた時期は、米国の対ソ関係の改善、国際紛争終結への動き、国際緊張の緩和、米国内経済の活況といった現政権に有利に働く環境にあり、また、経済の安定期に大きな変革を求めていないという国民の現状維持願望が大きかった。さらに共和党がテレビを通じた巧みなキャンペーンを展開したことによって、「第2次大戦後の選挙では、同一政権2期8年後には反対党が勝利する」と

いうジンクスは破られ、共和党3期連続政権の誕生となった。

しかしながら、同時に行われた連邦議会議員選挙では、民主党が上院で1議席、下院で3議席を増加させ安定多数を維持する結果となり、米国民の政治的バランス感覚とでもいべき「大統領は共和党・議会は民主党」のパターンが定着してきた感がある。つまり国民は内政・外交両面で、民主・共和両党に対しそれぞれ100%の信頼はよせていないということなのであろう。

行政府（共和党）はこれから4年間を少数与党の政権として、立法府（言いかえれば民主党）の厚い壁をどのようにして越えていくのか、下院議員の経験があり、議会内に多くの知人・友人をもつといわれるブッシュ大統領の手腕がみものである。そのブッシュ政権は、政権発足1ヶ月後の世論調査で極めて高い支持率を記録し（レーガン政権発足同一時期よりも高率）、また民主党員からの支持ぶりも過半数を越えるなど好調なすべりだしであったといえよう。

一方、最近6回の大統領選挙で5回敗北（そのうち3回は惨敗）した民主党にとり、その復活の可能性はあるのか。既に、1992年選挙に勝利をおさめるべく、民主党内の動きが活発化している。しかし、ブッシュ政権が打ち出している対外政策や国内政策は、ともに民主党の主張とそれほどの差はなく、国際的な緊張がうすれ、国内経済に大きな破綻がみられない状況が続けば、民主党による政権奪還はよほどの人物を候補に立てない限りかなり難しいとの見方が多い。

## II. 1988年大統領選挙を振り返って：破られたジンクス

### 民主党苦戦の歴史

第2次大戦後のトルーマン大統領当選（1948年）を最後に、米国が政治的経済的によほどの重大な状況下におかれないと、民主党候補は大統領選挙には勝てないという事態が続いている。

1960年にジョン・F・ケネディが勝ったのも、活発化した公民権運動の大きな流れの中での勝利であり、その勝ち方も獲得選挙人数では303対219と大きな差に見えるものの、一般得票数ではわずか11万票差の49.74%対49.55%という、文字通りの辛勝であった。続くリンドン・ジョンソンの勝利にしても、現職の強みと共和党の人選ミスによるものであった。また、ジミー・カーターの当選（1976年）もウォーターゲート事件以降の対中央政界不信感に乘じた勝利であり、これとても

## 大統領選挙戦からみた米国政治の展望

50.1 %対 48.0 %という僅差の勝利であった。

一方、民主党は敗北する場合は地滑り的大敗となることが多く（勝つ場合は僅差）、第2次大戦後は苦戦の連続であったといえる。

### ジンクスへの挑戦

1988年の大統領選挙にはいくつかのジンクスへの挑戦があった。たとえば、現職の副大統領が引き続いで、大統領に当選することは極めて難しい。また第2次大戦以後、2期8年同一政党政権が続いた後に反対党が勝利している。さらに裕福な家庭出身の共和党大統領はここ80年間誕生していない。共和党ブッシュ候補にとり、このような「ジンクス」はかなりきびしいハードルであったといえよう。

副大統領が大統領職にチャレンジして失敗するというジンクスについては、最近ではリチャード・ニクソン、ヒューバート・ハンフリーなどの例がある。しかしながら、ブッシュ候補は1836年に当選したヴァン・ビューレン以来、実に152年目にして、このジンクスを破ったのである。時代は大きく違うが、ヴァン・ビューレンは2期8年人気の高かった大統領（第7代アンドリュー・ジャクソン）の下で、地味な女房役に徹して副大統領を務め、その大統領の支持を背景に選挙に勝利を収めた点で、今回のブッシュ勝利の状況と極めて似ていたといえよう。

また二つめのハードルが越えられたのは、国内経済の好況、国際緊張の緩和といった好条件下で、国民が大きな変化を求めなかつたためであり、引き続き共和党の3期続投となつたわけである。

さらに三つめについては、ブッシュ候補がニューイングランドの裕福な家庭（父は銀行家であり、上院議員も務めた）に育つたものの、極めて旺盛なチャレンジ精神から、第2次大戦時に最年少の海軍パイロット志願者となり、後にはイエール大学卒業後に油田探しのためテキサスにおもむいたり、挫折と成功の繰り返しの中で多くの苦労を重ねた結果、単なる裕福な家の子弟とはちがう強さを身につけたがゆえに、そのハードルも越えることが可能であったのであろう。

### 選挙戦の経緯

ブッシュ候補にとり、88年の選挙は本来苦しい戦いを強いられるはずのものであった。事実、選挙の序盤戦から中盤戦にかけて、つまり

8月の共和党全国大会の時点までは世論調査で民主党のデュカキス候補が大幅なリードを保っていた。

これは、民主党側のキャンペーンの成功というよりも、1987年10月の株式大暴落の印象が強く残っている時期に、イラン・コントラ問題など現政権をゆるがす事件がメディアによって大きく報道されたことが民主党に有利に働いたからである。しかし、国内経済の好況が持続され、国際緊張の緩和が進み、上述のイラン・コントラ問題などがニュース性を失うにともない、共和党への支持がもりかえしてきた。

7月頃にはデュカキス候補が17%近いリードを保っていたにもかかわらず、10月頃には逆にブッシュ候補が10%以上リードするという、わずか3ヶ月の間に30%という大幅な逆転現象がおこった。これは大統領選挙史上、前例のないことであった。

88年大統領選挙戦の中で、民主党にとっての大きな弱みの一つは、「平和と繁栄下の米国で、ホワイトハウスからその住人を追い出すことは不可能に近い」というアメリカの流れがあるという点であった。

さらには民主党がマイノリティー層の意見を代弁する党とのイメージが強まるのにともなって、南部白人層の支持を大幅に減少させてしまった点があげられる。また、デュカキス候補がブッシュ陣営の主としてテレビ・コマーシャルによるネガティブ・キャンペーンに対しすぐさま反撃することもなく、ほぼ2カ月間の空白を作ってしまったことも問題であった。デュカキス候補がブッシュ候補のテレビ・コマーシャルによる攻撃を低俗なものとして無視する態度をとったのであれば、それは現代のテレビのもつ強力な影響力を過小評価したことになる。

### ブッシュ優勢となった背景

ブッシュにとり幸運であったのは、まず第一に、レーガン大統領の支持率が政権末期にもかかわらず、就任当時とかわらぬ60%以上の高率を示していたことであった。第二に、低いインフレ率と低い失業率、そして好景気に対する国民の強い満足感といった良い環境の下での選挙であったこと。第三には国際緊張の緩和が進んでいたことである。中南米、アフガニスタン等の地域紛争は幾分残ってはいたものの、対ソ関係の改善、中東における紛争の停止、あるいは和平のための交渉開始といった世界全体としての平和への流れが政権党である共和党にとり有利に働いていた。

## 大統領選挙戦からみた米国政治の展望

地方政治家として名をなしたものの、外交経験の浅いデュカキス候補にとり、この状況下で戦うことは容易なことではなかった。しかし、民主党にとり上述のような「平和と繁栄」が存在しなかったとしても、苦しい戦いとなつた可能性は強い。

今回も含めた最近6回の選挙で、民主党は5回も敗北（勝利はカーター大統領の1回のみ）を喫しており、勝っても僅差、敗れるときは地滑り的大敗、の状況が定着はじめている感がする。この状況は、白人層の民主党離れの潮流と関係がある。最近では1976年のカーター候補と今回のデュカキス候補以外に、40%以上の白人票を獲得した民主党候補はない。さらに細かく白人男性のみをとりだしてみると、30%台の支持しか得ていない。また地域的に南部白人層に限ってみれば、30%そこそこの支持ぶりである。

そして1980年と84年の2回の選挙で共和党のレーガンに投票した民主党員（いわゆるレーガン・デモクラット）を取りもどすべく、デュカキス候補もおおいに努力したが、ほとんど成功しなかつた。

3回連続して共和党候補に投票した人物をもはや民主党員とは呼べないとの見方をする向きもあるが、連邦議会、地方レベルでの選挙では依然として民主党候補に投票している場合が多いわけであるから、やはりレーガン・デモクラット（「大統領選挙に限って、党派を超えて自分の好みの候補に投票する民主党員」とでも解釈すべき）なる呼び方は残さざるをえない。

別の見方をすれば、このようなさまざまな不利な条件下であるにもかかわらず、デュカキス候補が今回の選挙で46%の得票率を獲得したことは、最近の民主党候補にしてはおおいに善戦したというべきである。

### キャンペーンの優劣

88年の選挙では、民主党も勝つ可能性はあつたし、事実、選挙戦のすべりだしは民主党にとって決して悪いものではなかつた。しかし、中盤から形勢が逆転し、選挙戦は共和党のペースにのつたまま終つた。

この選挙戦の過程で、多くの注目すべき点があり、勝敗を左右するいくつかの分岐点が存在したが、ここでは両党的キャンペーンの進め方の違い（あるいは優劣）について触れてみることにする。

まず選挙キャンペーン・スタッフに関する差異がみられた。ブッシュ陣営にはせ参じたスタッフたちの資質を一言でいえば、政権獲得後

も引き続き政権を支えていく政治にたけた人物（政治の玄人集団）が多かった（例えば政治のプロのジェームズ・ベーカー、選挙プロのリー・アットウォーター、メディア演出プロのロジャー・エールズなど）。しかしながら、デュカキス陣営の下にはいわゆる選挙プロは少なく、主として20代30代の素人集団（しっかりした指揮官がないと鳥合の衆になってしまふ）が多く参加していた点が対照的であった。

二番目はスタッフの活用のしかたの差異がめだつた。デュカキス候補がキャンペーンの下級スタッフの採用さえ人にまかせずに自ら指示を与えていたといわれているのに対し、ブッシュ候補は選挙戦略の立案はすべてスタッフたちにまかせ、自分はその指示に従って行動することに徹していた。ブッシュ候補はこのスタイルを先輩レーガン大統領から学んだといわれる。大事なことを人にまかせることができたかどうか、人の意見に素直に耳をかたむけることができたかどうか、が勝つための大きな要因の一つであったとの見方も強い。

さらにメディアに対する考え方にも違いがあった。各種のメディア、特にテレビの効用について、ブッシュ陣営のほうが強く認識していたのに対し、デュカキス陣営はそれほど認識がなかった。

1960年のケネディ対ニクソンの対決の際、はじめてテレビ討論が導入され、民主党のケネディ候補はその効果を十分に利用して勝利を収めたといわれており、民主党はその意味ではテレビ利用の先駆者であったわけである。その年から米国はテレビ選挙の時代に入ったといわれ、毎回その効果について論ぜられてきたが、今回の88年選挙ほどテレビに強く主導された選挙はなかつたのではなかろうか。そのような状況になった大きな理由としては、両党間に国家の行方を左右するような重大な争点がなかつたことや、両党候補が特に強い個性の持ち主でなかつたことから、テレビ・コマーシャルを通して映しだされる候補者のイメージが、一般国民に大きなインパクトを与える結果となったものと思われる。

テレビ時代の選挙の勝敗は、その政策や人柄、能力などの比較によって決まるのではなく、メディア・プロの作りだす企画とその演出の優劣によって決まってしまうといつても過言ではない。予備選挙のように党内ライバルとの戦い、あるいは戸別訪問、各地の集会で国民との直接対話といった形で候補の人柄、政策を直接に表明できるのであれば、それはそれで有効であろうが、その方式を大統領選挙に持ち込んで効果をあげるには限度がある。本選挙は全米をまたにかけての戦いである。いきおい、全米にメッセージを流すにはテレビを活用せ

## 大統領選挙戦からみた米国政治の展望

ざるをえない。それゆえにメディアに対する認識の違いが勝敗を大きく左右することになる。

### イデオロギー論争

88年の選挙で勝敗決定に影響を及ぼしたと思われる言葉に、「リベラル」がある。米国社会はいわゆる保守化の傾向にあり、今回の選挙では「リベラル」が大きな政府やバラマキ福祉、倫理観の欠如といった「マイナス」の意味をもつ言葉として使われた。ブッシュ陣営はデュカキス候補への批判の言葉として「リベラル」を用い、デュカキス候補はこのレッテルを貼られまいとして逃げまわるといった奇妙な状況が展開された。

元来「リベラル」なる言葉は、自由主義、進歩、個人の行動への寛容さなどの米国社会の先進性を意味する言葉であったはずであるが、今回の選挙における使われ方は、その点で非伝統的でありかなり異常であったと思われる。

### III. 「大統領は共和党・議会は民主党」：アメリカのバランス感覚

米国では第2次大戦後の第83議会、つまり1954年の選挙以来、連邦下院は常に民主党が多数派であり、上院もレーガン大統領初当選の1980年及び82年、84年の3回の選挙結果で共和党が多数を占めた他は、すべて民主党が多数派であった。つまり共和党のアイゼンハワー、ニクソン、フォードの各政権下では常に議会は上下両院共に民主党多数であったから、レーガン政権下で上院のみではあるが共和党が多数派であったことは、むしろ例外的な状況であったわけである。

したがって第2次大戦後の米国政治においては、「大統領は共和党・議会は民主党」なる図式がかえって正常な状態であったといえるかもしれない。ブッシュ政権も民主党多数の議会との対決で前途多難であるといわれているが、実はあたりまえの状況にあるといえるのである。

今回の議会選挙でも従来どおり上下両院共に現職が強いという結果が出ており、民主党多数の図式が維持された。

上下両院共に民主党が勝利を収めたことは、全般的な保守化傾向になんら矛盾するものではなく、その論争点がほとんどローカル・イシ

ューであり、かつ民主党候補に知名度の高い人物が多かったことも民主党の勝利の要因である。

民主党議員にはイデオロギー的にみてかなり保守派の議員が多く（特に南部出身者、ベンツエンもその一人）、投票のさいもパーティーラインを越えて共和党よりの法案に賛成することも多い。

米国は上下両院共に1選挙区1議席の小選挙区制であるため、保守色の強い地域では、民主・共和両党の候補がイデオロギー的に似かよっていたとしても不思議ではない。いずれにしても第2次大戦後の政治の潮流としての共和党の行政府支配、民主党の立法府支配のパターンは、米国民が米国の政治をいずれの党にも100%の信頼をもってまかせているわけではないことを示しているのである。これは、アメリカ国民のバランス感覚の表れとでもいうべきであろう。

#### IV. 米国政治の行方：ブッシュ政権の苦闘

新政権発足後1ヶ月目の各種世論調査の結果では、ブッシュ大統領の人気は上々であった。ABCテレビの調査では76%の支持率となっており、レーガン政権発足時の68%よりもはるかに高い。またハリス調査機関の結果でも64%と高く、レーガン政権の62%を上まわっている。さらに、民主党支持層の52%つまり過半数が新大統領を支持しており、全体として国民党から好意的にみられていることが分かる。

しかしながら、民主党議員の中には選挙中のブッシュ陣営による対民主党ネガティブ・キャンペーンに怒りを感じている者もかなりいることされており、それゆえか閣僚人事では大統領から指名されたタワー元上院議員の国防長官承認審議で、上院の軍事委員会で11対9で承認が否決された。しかしブッシュ大統領はこの結果を「尊重」することなく上院本会議での決着にもちこんだ。しかし、大統領による説得も効なく、ほぼ予想されたとおり53対47で否決されている。これは米国史上第9番目の上院否決であり、新大統領による初の閣僚人事の否決としては史上初のできごとである。

通常新大統領と議会との間には暗黙の了解として、約3ヶ月ほどのハネムーン期間があるといわれているが、今回はそうではなかったことになる。もっとも、その後の国防長官指名（チェニーワークス上院議員）は委員会も本会議も全会一致で承認している点を考えると、最初の否決はブッシュ大統領に対する批判というよりは、むしろタワー元上院

## 大統領選挙戦からみた米国政治の展望

議員個人に対する批判であったといえないこともない。

大統領のとったこの一見無謀とも思える上院本会議採決強行については、評価が分かれる。マイナスとされる点は、敗北が予想されていた本会議に採決をもちこんだことで、新政権のスタートのつまずきを内外に明らかにしてしまったことである。しかしながら、最後の最後まで一度決めた人事を引き下げる事なく支持し続けたことにより、逆にブッシュ大統領の意志の強さと信義の強さを内外に印象づけた点はおおいなるプラスであると評価された。

同様のケースとして、ブッシュ候補がクエール上院議員を自分のランニング・メート（副大統領候補）として選んだ一件を指摘することもできる。マスコミのみならず党内有力者からも指名撤回を提言する声が大きかったが、断固として自分の決定をまげずにクエールを守り通したことが、ブッシュの評価をおおいに高めたのである。これもまた先輩レーガンから学んだものであろうか。

レーガン大統領も在任中自分の部下（閣僚、補佐官等）が不祥事にまき込まれた際に、彼らを解任せぬむしろこれをかばい続けたことで部下思いの上司であるとして評価を高めた。また部下の方も上司レーガンに迷惑をかけまいと自ら辞任したため、結果としてレーガン大統領に傷がつかず、逆に人気を高めることになった。

人事をめぐりブッシュ政権には多少のつまずきがあったものの、その後の再指名も含めて閣僚人事は順調に行われ、本格的な政策の遂行が始まった。内政の施行に関して、ブッシュ大統領は前任者よりもより直接かつ頻繁に、議会にアプローチするものと思われる。ブッシュは長年にわたり、議会人と行政官との両面において深い経験を有しており、超保守派からリベラル派まで広範な交友関係を誇っている。

腹心のジェームズ・ベーカーを国務長官に据えたことは、同氏が長年の親友であり選挙戦での最大の貢献者であったということばかりでなく、実務家として評価も高く議会にも受けがよい点を考慮したからにほかならず、他の閣僚にしても議会（特に民主党）に受け入れられ易い人物を選択したようにみうけられる。このことは、少数派政権として議会の協力なくしては政策の遂行が困難となることを十分に自覚した結果であろう。民主党支持といわれる『ニューヨーク・タイムズ』紙など米国主要マスメディアの論調も、ブッシュ政権に対し比較的好意的である。

ところで第3期目に入った共和党政権は「頭」が変わったとはいっても政策の継続性を無視するわけにはいかない。前任者から引き継いだ

大きな荷物の一つは「双子の赤字」である。財政赤字の解消が進まなくては、貿易赤字の改善も望めない。ぜいたくな消費生活に慣れた米国民に、消費を抑え貯蓄をせよといつても、おいそれとは受け入れられるものではないであろう。だとすれば結局は国内の資金不足を埋めるために、さらに外国からの資金調達を増やしつづけなければならなくなる。

ブッシュ大統領は選挙キャンペーンのさい増税はしないと公約しているから、増税の必要性が生じてきても、なかなか踏み切れないものと思われる。ただブッシュ側近筋からの話としては、4年間の任期中をとおして増税しないといっているわけではない（就任第1年目の増税はないが、その後は分からぬ）との声もある。

増税を一切せずに双子の赤字の解消を目指すことは可能なのであるか。国際緊張の緩和が進み米ソ関係が改善される状況下では、米国民の目もおのずと国内へ向けられることとなるが、ブッシュ政権の今後の施策が大いに注目されるところである。

## V. 1992年の大統領選挙戦：民主党の明日は

今日のアメリカ国民は4対3で民主党支持のほうが多数であるという。1970年代にはこの比率が2対1と圧倒的に民主党寄りであった。この時期からみれば民主・共和両党の支持比率が接近したものの、依然として民主党寄りの国民が多数であるとギャラップなどは世論調査結果をまとめている。

事実、連邦議会（上下両院）の議席数をみれば、これは容易に理解できる（上院55対45、下院260対175と民主党優位）にもかかわらず、民主党は大統領選挙では惨敗続きである。

それでは、今後このような「大統領は共和党、議会は民主党」という形が、アメリカに定着してしまうのであろうか。

### ターゲットの設定

民主党内では、勝てるチャンスもあったと思われる88年の大統領選挙に敗れた反省から、路線論争が活発化している。次の選挙に必ず勝つためには、何を、そしてどこをターゲットにすべきかという論議である。

## 大統領選挙戦からみた米国政治の展望

選挙の敗因を候補者のキャンペーンの拙劣さや、その資質の所為にするのは簡単であるが、問題点はそのような底の浅いものではない。現在民主党でおこなわれている論争の主要なポイントの一つは、「ターゲット」の絞り方である。つまり民主党候補が主なる相手とすべきは中産階級なのか、それとも貧困層なのかということである。もう一つは地理的にみて、南部指向かそれとも西部指向かということである。また、有権者の中で約半数を占める白人プロテスタントの票の民主党離れ傾向をいかにとめるかという点も問題となっている。

アメリカの社会階層と民主党の支持層については、年収2万5千ドルから5万ドルのいわゆる中産階級に属している有権者の民主党支持ぶり（現在40%）が、低下の一途をたどっている点が気になるところである。つまりこの層が最も税負担が高く、従って小さな政府を強く求めるわけである。民主党が「大きな政府」を指向している印象を与えていたる現状をいかに打破するかが、これらの階層を民主党に引きつけるための重要な課題になってきている。

地理的なターゲットについては、南部を重視する戦略担当者たちが、88年の選挙で民主党が南部及び周辺諸州で大統領選挙人を1人も得られず（155対0）惨敗したことをふまえ、このままの状態で放置すれば永久に勝つことはできないと主張している。次回出馬の可能性のあるテネシー州選出のアルバート・ゴア上院議員をはじめとして南部出身議員たちは、民主党が全米レベルで大統領選挙に勝つためには南部を制する必要があるとして、政治的に右よりな政策を打ち出すことが不可欠であると考えている。

一方西部重視グループは、88年の選挙でデュカキス候補が西海岸諸州（ワシントン州、オレゴン州）において勝利したり善戦（カリフォルニア州、一般得票で48%獲得）したことから、あと少しの努力で勝利につなぐことが出来ると考えている。

しかしながら、民主党内部においてすべての有力幹部が深刻に大統領選挙の敗北を反省しているかどうかといえば、必ずしもそうでもなく、今回の敗戦を大統領候補個人の作戦失敗とみなす者も多い。

いずれにせよ、民主党の進むべき道を探りあて、そしてその道を正確に進むことは容易ではない。このような内部論争や葛藤が、結局は大統領選挙に勝利する日まで続くことになるものと思われる。

### 次回を目指すエース達

民主党にも大統領候補にふさわしい人材がいないわけではない。議会の多数派である民主党には当然にして大統領にふさわしい人物は多数みうけられるのである。保守派では副大統領候補としておおいに名をあげたロイド・ベンツェン上院議員やサム・ナン上院議員、中道よりリベラルのアルバート・ゴア、ビル・ブラッドレー両上院議員、雄弁かつ優れた行政能力をもつクオモ・ニューヨーク州知事、さらには党内のまとめ役として人望の厚い民主党指導者評議会(DLC)指導者のチャールズ・S・ロブ上院議員(前バージニア州知事、ジョンソン大統領の女婿)などが88年出馬を見送り、力を温存している有力な人物である。また3回連続で出馬することが予想されるジェシー・ジャクソン師の動向は、選挙そのものばかりでなく公民権運動の流れの一つとしてあるいは強力な草の根運動の一つとして大いに注目すべきものである。他にリベラル派のリーダーとしてのエドワード・ケネディ上院議員は常に候補の一人としてあげられており、条件が整えば強力な候補になることが考えられる。

1992年に向けて多くの有力人物が活動を開始しているが、これまで常にいわれていることは、現行の民主党の予備選挙・党員集会のやり方では、保守派、稳健派の人物は生き残りにくく、したがって民主党内部のレースでは勝てても幅広い全米レベルでは支持を得られにくい人物が最終的に選出される可能性が強いために、結局は共和党との対決で敗北してしまうというおそれが存在するということである。

### 共和党連続4期はあるか

1992年における共和党候補はブッシュ大統領になるであろうとみるのが順当である。現時点では、前任者の残した「平和」と「繁栄」の續くなかに身をおくだけで、かなりの期間は順調に流れていくであろう。しかしレーガン政権の残したマイナスの財産(双子の赤字)がどのように処理されるのかが、いまだに明確になっていない。この処理を間違えると4年任期の後半部分はブッシュ大統領も、共和党も、厳しい状況に追い込まれることもあり得るのである。

## VI. 終りに

争点が明確で強力な候補が出現し激烈な戦いを演じれば、国民もそれに応えて積極的に反応する（高投票率）。争点のない盛り上りに欠けた場合にはそれなりの結果しかでない（低投票率）。1988年の選挙は、その点では1924年以来の低い投票率であった（88年は49%＝投票者数8896万人；84年は53.3%＝投票者数9265万人。投票率は全投票者数÷18才以上の米国人×100である。登録有権者で除するのではない）。

米国の政治の動きにはある種のサイクルがあった。2期8年の後には反対党が勝利を収める、つまり8年間の政治への国民の「倦み」の結果が一つのバランス感覚として政権の交代を引き出した。しかし今回の選挙ではそのサイクルが破られた。今回は国民が「行政府の政権交代」の形をとらずに「行政府は共和党、立法府は民主党」という権力の相互チェック体制の定着化を選んだかに見える。そして、国民が「倦み」を嫌うというより、「安定・現状維持」を好むという結果となつた。ブッシュ政権はこれを受けて一部の閣僚のレーガン政権からの留任の形をとり、政権の継続性を内外に示し、国民の意識に応えている。

しかしながら、国民はかつて自信にみちた前大統領の笑顔の下で「赤字」などは気にもとめないかのように、消費文化を満喫してきた。新大統領には、国民のその楽しみを奪うことを第1目標に掲げなければならない苦しみがある。ブッシュ大統領の就任演説も決して前任者のような威勢のよい、耳に心地よいひびきのものではなかった。米国の背負う「財政赤字」「ホームレス」「麻薬」などのマイナス面を、淡々と率直に国民に語りかけている。今年は初代大統領就任から200年目にあたるが、我々は二人目の“ジョージ”的手腕に注目したいところである。

\*本論は筆者個人の見解であって、所属機関である日本国外務省の見解を示すものではありません。

Views expressed in this article are that of the author and not necessarily reflecting the views of the Japanese Ministry of Foreign Affairs.